留学先からの報告（２０１４年１１月）

2014 年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生
Pennsylvania State University, Department of Meteorology
南出将志

本報告書をお読み頂きありがとうございます。アメリカに来てから３ヶ月たった報告書としまして、今回は研究室生活から垣間見えた日米の学生の違いについて少し考察を加えた上でご報告したいと思います。まだ三ヶ月しかこちらにいないこともあり、あまり具体的なイメージを喚起する内容ではありませんが、日本の大学院と海外大学院で悩んでいる方の判断材料として役立てば幸いです。授業や所属研究室の情報などは、末尾に Appendix として記しますので、そのような情報をお探しの方は末尾までどうぞ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

文化的背景による日米の学生の働き方の違いに関する考察

１．背景：桃源郷と地獄と

「世界のどこかには 17 時になると強制的に帰宅させられる職場があるらしい。」あくる日の寮の食堂にて少し塩気のききすぎたトマトソースのパスタを食べていたとき、トルコ人のポスドクが話し始めた。どうやら彼が以前の職場で実際に体験した話だそうだ[1]。まるで桃源郷を語るかのようなその口ぶりは、しかし私にはまだ見ぬ地獄の物語であるかのように聞こえた。「絶対にそんなところで働きたくない。」それが正直な感想であった。

この感想は少しばかり極端なものであるかもしれないが、私特有のものだとも思えない。日本（東大）とアメリカ（Penn State, Notre Dame）の研究室を比較して、日本の学生は本当に長く働いていた。アメリカの大学院生のほとんどが 17 時には帰路につき、指導教官とのミーティング前に徹夜で研究する姿など見たことがない。特に日本の修士の大学院生は自分で学費を払っているにも関わらず、雇用されている（=パフォーマンスが悪ければ解雇されてしまう）アメリカの学生と較べてもなおそうであるのだから、同じ条件であれば勤務時間の差はさらに広がるに違いない。研究が好きな人も、嫌いな人も（あるいはこの議論は会社や趣味の世界にも適用できるかもしれない）、私が日本で見てきた多くの人々は、アメリカで接する人々よりも遥かに高いプライオリティを持って、「働く」ことを選択している。

本文章はそういった態度の異なる学生が自分の意思で（=やりたいから）研究しているの

[1] スウェーデンの話であるらしい。詳細は不明。

か、外部からの圧力による（やらされている）のかを区別するものではない。むしろ、本人が自由意志と考える局面においても、周囲の環境は選択に影響を与えるであろうし、またほとんど強制に近いような指示を受けた場合でもそれを実行するかは選択可能であると言う点で両者は明確に区別できるものではなく、そのような分類に意味を感じない。私がここで取り上げたいのは、特定の外部からの圧力（ex.指導教官とのミーティング）に対する反応が、アメリカと日本で顕著に異なるという事実である。こちらの研究室で二ヶ月ほどを過ごした頃に、現在の研究テーマを題材にしたプロジェクトの計画書を書く機会があった。同分野の Ph.D 学生と協力して書いていたのだが（このときはアメリカ人の彼も深夜まで残っていた。アメリカでも当然指導教官のプレッシャーは感じるのである）、私が必死で指導教官が期待するところまで進捗をあげようとするのに対して、「（同程度の時間を割いた上で）終わったところまでを提出する」とする彼の態度が印象的であった。このような反応の違いは一体どのように形成されるのであろうか。以下、いくつかの古典と少しの小説を参照しながら、この疑問にこたえていきたい。

２．行動を駆動するものとしての自尊感情

反応の違いを文化と名付けてしまうのは容易い。しかし、それは（「どうして赤道は暖かくて北極は寒いの？」「場所が違うから！」と言うように）何の説明にもならない。赤道と北極は物理的なメカニズム自体は共有しているが、太陽から受け取る単位面積辺りのエネルギーが異なり温度差が生じている。アメリカと日本の差異を考える上で共有するメカニズムとして、ここでは自尊感情を用いて議論したい。*遠藤*[1992][2]によれば、自尊感情とは“一般に自分をポジティブな存在であると思うこと”であり、その構成要素として“自分を「とてもよい(very good)」と考える場合と「これでよい(good enough)」と考える場合”の二つがある[3]。前者は“優越性や完全性と関連”し、他人より自分が優れていると思う感情、一方で後者は自分が平均的あるいは周囲と較べて劣っていたとしても、自分で決めたハードルを超えたことに満足する感情と言える。前者は比較対象や賞賛する存在を必要とするという点で、後者より社会的である。換言すれば、後者はより個人的な基準に基づいたものである。

また、人は誰もが、理想とする自分の姿である「理想自己[4]」を抱く。これは社長になる姿であったり、仕事のできる存在として頼られる姿であったり、恋人のいる姿であったり、将来の夢に近いものから日常的な欲望まで様々だ。共通点は、自分が「こうなりたい」あるいは「こうはなりたくない」と思っているという事実である。このような理想自己と現実の自分の姿との差は、自尊感情と密接な関係がある。すなわち、人々は個人的にあるい

---

[2] 遠藤由美 (1992), 自己認知と自己評価の関係 –重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討–, Japanese Journal of Education Psychology, 40, pp157-163

[3] Rosenberg, M. (1965), Society and the adolescent self-image, Princeton, NJ : Princeton University Press.

[4] 詳しくは上記論文に加え、『自己愛人間/小此木啓吾著』などを参照されたい。

は社会通年などから理想自己を設定し（「社長になりたい」「デキる男になりたい」「独り身にはなりたくない」など）、それを満たそうとする感情≒自尊感情に従う傾向がある。誰もが理想とする自己の姿に自分自身を近づけることができるように、意識的・無意識的に自らの行動を選択している。少なくとも本文章では、そのようなメカニズムを日本人とアメリカにいる人々が共有しているという前提を置く。その上で浮上する問題は、各々がどのような「理想自己」を抱くかである。

３．生まれ持つものとしての上様の才覚と、神の前に平等な人々

ここで思い出すのは、時代劇でよく見るような、幼い上様[5]に対して、家老たちがひれ伏している姿である。曰く「さすが、上様は齢５歳にして当主の才覚が備わっていらっしゃる。」といった具合である。幼児に老人がひれ伏すという奇妙な光景は、しかしながら何の違和感もなく日本の視聴者に受け入れられるであろう。将来的に大名家の当主になるような子供には、権力者に伴うべき器[6]を生まれもっているらしい。ここで前提とされているのは、「基本的に人は平等ではない」という感覚に他ならない。上様と家来とでは格が違うのである。それは『豊饒の海/三島由紀夫著』や『すべてが F になる/森博嗣著』などで繰り返し描かれてきたところの、持つものと持たざるものの差異ではないだろうか。キリスト教に根差した「神の前にみな平等」感を抱くアメリカの人々と決定的に異なる点がここにある。

このような日本人の感覚における不平等さ、換言すればヒエラルキーの中に自身を位置づける感覚は『菊と刀/ルーズ・ベネディクト著』にて詳細に議論されている。現代の具体的な事例に適用するならば、にわかファンを攻撃する○○オタクや、「下手だから…」と上手い人たちと一緒にスポーツをするのを遠慮する人々（趣味の世界ですらヒエラルキーが存在）などが適当であるように思う。日本人のこの「社会が不平等な人間どうしのヒエラルキーである」という感覚の傾向は、「とてもよい(very good)」の自尊感情と大変相性がよいと思われる。なぜなら、ヒエラルキーの中では理想自己が得てして「周囲より高い評価を得たい」「落ちこぼれたくない」などのように周りの人間との比較の中で定義されやすいことが想定されるからである。そしてもちろん、これらの感情は自分で「優れている」と思うだけでなく、周囲からヒエラルキー上位として認められなければならない。より研究成果を出す、より仕事ができる、より趣味の○○が上手い、平均以下ではないなど理想自己の形式はもちろん千差万別であるものの、それら理想自己の達成は実際の成果だけでなく、それを然るべき他者から承認されることで初めて達成されるものであるという点で一貫している。この広い意味での宗教観に基づく理想自己と（自尊感情と関連するであろう）承認欲求との結び付きの強さが、日本人とアメリカにいる人々を隔てる大きな差異の

---

[5] ここでは大河ドラマ『篤姫』で描かれた徳川家達など、血統により若くして当主になった者を想定している。

[6] 『武士道/新渡戸稲造著』における「仁」の概念など。

一つであると考えられる。

４．結論：なぜ日本人は Workaholic となるのか

ここまでの議論で、日本人とアメリカにいる人々は共に理想自己を達成することで自尊感情を満たそうとすること、および日本人はいかに他者から承認されるのかが理想自己の達成においてより大きなウェイトを占めることを確認した。ここで冒頭の問いに戻ろう。日本人学生はなぜ金銭的な拘束がないにも関わらずアメリカにいる典型的な学生達よりもよく働くのだろうか。プレッシャーに対する反応はなぜ異なるのであろうか。

想起される自尊感情を考慮すれば答えは明確だ。日本人にとっての理想自己の達成は「成果(very good)＋認められること」の影響が大きいと考えられるのだから、たくさん働くことで周囲の人間より多くの成果を出して周囲から評価を受ければ受けるほど、自尊感情は満たされ日本人は幸せになる。また、仮に成果が思うように出なかったり、成果が出ても周囲から認められなかったりした場合には、周囲と較べて「落ちこぼれたくない」という負の理想自己がより一層強く働くことを掻き立てる。その恐怖感は絶大である。自由意志という自覚のもとに、たとえ金銭的な拘束が無かったとしても、ほぼ選択肢はないと言っても過言ではない。いずれにせよ、典型的日本人は多く働くことを選択することになるのである。加えて、彼らの目標とする成果は、（承認を求める対象である）指導教官の期待と寄り添わざるを得ない。一方で理想自己に占める「成果(good enough)」のウェイトが大きいと考えられるアメリカにいる人々にとっては、目標は「自分がやれるとこまでやった上での成果」となろうか。同じ時間をかけ、同じアウトプットを出したとしても、それに伴うプレッシャーは大きく異なる。

最後に、冒頭の「17 時になると強制的に帰宅させられる地獄」について言及して論を閉じたい。もしも勤務時間が固定された場合、自分より優れた人々（例えば同じ 9:00~17:00 の勤務時間の中で、自分より効率よく働き多くの研究成果を残す人）を前にして、典型的日本人である私に残された道は甘んじてヒエラルキーの低下を受け入れ絶望するしかない。帰宅させられなければ、そんな化け物たちに対抗する希望がまだ残される。このようなある意味消極的とも言える理由は、しかし必ずしも悲観的なものではないと私は考えている。少なくとも私のような研究者を目指し留学する人間にとって、このような負けず嫌いな恐怖感は「好きなことを仕事にできる」楽しさと相重なり、「ずっと働いていられる」というアメリカにいる人々には持ち得ない圧倒的な優位性を形成していると信じてやまない。毎日 07:30~23:00 の間をオフィスで過ごす今の生活は、好きなことにどっぷりと浸り、環境に恵まれ、様々な形で評価を頂き、このような暗い文章からは想像もつかないほど希望に溢れたものである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここまでお読み頂きありがとうございました。Appendix に移る前に、改めて、ご支援頂いている船井情報科学振興財団の皆様に感謝の意を示したいと思います。このような貴重な機会を提供頂いたご厚意に応えることができるよう、今後とも精一杯精進したいと思います。よろしくお願いいたします。

Appendix 1. 授業

今学期とった授業は以下のようになります。

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9:45		METEO-554-001		METEO-554-001	
10:00		Electrical Eng West 201		Electrical Eng West 201	
10:15		Chamecki, Marcelo		Chamecki, Marcelo	
10:30					
10:45					
11:00					
11:15	METEO-520-001		METEO-520-001		METEO-520-001
11:30	Walker Bldg 103		Walker Bldg 103		Walker Bldg 103
11:45	Bannon, Peter R.		Bannon, Peter R.		Bannon, Peter R.
12:00					
12:15					
12:30					
12:45					
1:00		METEO-591-001			
1:15		Electrical Eng West 101			
1:30		Verlinde, Johannes			
1:45					
2:00					
2:15					
2:30	METEO-531-001		METEO-531-001		METEO-531-001
2:45	Leonhard 101		Leonhard 101		Leonhard 101
3:00	Verlinde, Johannes		Verlinde, Johannes		Verlinde, Johannes
3:15					
3:30			METEO-590-001		
3:45			Walker Bldg 112		
4:00			Verlinde, Johannes		
4:15					
4:30					
4:45					
5:00					
5:15					
5:30					

■ Meteo-520: Geophysical Fluid Dynamics

時間：50 min × 3 回 /week

教科書：Fluid Mechanics by Kundu, Cohen and Dowling

博士課程を通じて４つしかない必修の一つで、基本的には必ず履修することになりま

すが、大学院レベルで同内容の講義をすでに履修していればスキップすることもできます。内容は流体力学の基礎、保存則、渦度の力学など。毎週宿題が出され、毎回平均して一日程度をそれに費やしています。基礎的な内容で、未履修者にとっては導入の役割を、既習者にとっては復習の役割を果たす授業です。宿題が多く、かつ講義で学んだ理論を実際の事例に適用してみる問題が多いので、とてもいい知識の整理となっています。

■ Meteo-531: Atmospheric Thermodynamics

時間：50 min × 3 回 /week

教科書：Atmospheric Thrmodynamics by Bohren and Albrecht

これも必修の一つで、スキップした一部をのぞいてほぼ全員が履修しています。内容は大気のエネルギー、熱力学第二法則、相転移、Skew-T グラフなど。教科書にこれが指定されているのは、著者が学科の先生であるからだと思われます（教えているのは著者とは違う先生です）。学期の間に１０個弱の宿題が出る点は Geophysical Fluid Dynamics と同じですが、こちらは知らなかった内容も多く、Office hour[7]などを利用してよく質問に行っています（理解するまで長々と付き合って頂けるのは大変ありがたいことです）。中間試験では「飛行機に乗ると、最初に緊急時の対処を説明するビデオが流れる。映像の中で人々は非常に落ち着いて酸素マスクを着用しているが、果たして本当にそんなことが可能なのだろうか。大気高層（300 hPa）で気圧調整装置が壊れた場合を考え、機内にどのような変化が生じるのかを考察せよ。」という問題が出ました。計算してみると、急激に雲が機内に発生し、気温が-40℃近くまで下がることが分かります。酸素と同時に体温の維持も急務です。

■ Meteo-554: Atmospheric Turbulence

時間：(75 + 20) min × 2 回 /week

教科書：なし

先生が熱意に溢れるあまり、通常の開始時間よりも 20 分早く始まってしまう選択科目です。私は履修登録せずに、聴講（auditing と言います）しています。乱流の代表的な理論について、最新の研究内容も交えながら説明してもらえる授業です。選択科目は必修に較べて、かなりレベルが上がります。とても難しいです。

■ Meteo-591: Ethics

時間：75 min × 1 回 /week

教科書：なし

研究倫理について学ぶディスカッション形式の授業です。例外無く全員に履修が義務付けられています。「不正を防ぐためにはどうすればいいか」「アカデミックハラスメントなどにどう対応するか」などが話し合われます。内容そのものよりも、ディスカッシ

---

[7] 授業の質問などを受け付けるために、先生が開放している時間のこと。授業時間とは別に設定されており、学生はアポイント無しでオフィスを訪れ、授業に関する質問や相談を自由にすることができます。

ョン形式というのが難しく、聞き取れたところですかさず発言するという方針で臨んでいます。ほとんど常に話し続けているような生徒から、終始無言で最後に発言を促されて少し話す程度の人まで、（語学力に応じて）様々な人がいる授業です。私も英語には一抹の不安を感じざるを得ませんが、評価がつかない（合否のみ）の授業であることが救いとなっています。

■ Meteo-590: Colloquium

時間：60 min × 1回 /week

学科の先生が持ち回りで有名な研究者や注目の若手などを呼んで開かれる講演です。毎回、講演時間以外にも講演者のスケジュールが1スロット30分ごとに公開され、空いている枠においては教授・学生が自由にミーティングを予約することができます。また、学生数名が学科の負担で講演者と一緒に昼食を食べることができる制度もあります（残念ながらまだこの昼食制度を利用できていません。来学期こそはぜひ活用したいと思います！）

Appendix 2. 研究室

予定通りに Fuqing Zhang 教授の The Penn State Center for Advanced Data Assimilation and Predictability Techniques (ADAPT)研究室に所属することになりました。現在はデータ同化を用いた台風の予測精度向上に関する研究を行っています。今後台風の力学にも挑戦したいです。詳しい研究内容は、成果が論文としてまとまった際に報告させて頂きたいと思います。Pennsylvania State University の気象学科は研究室ローテーションを行っておらず、入学時には所属研究室が決まっていなかった人も入学後一週間ほどで所属研究室を決めていました（副学科長などが相談にのっていました）。全体的に、必修授業が少ないこともあり、授業よりも研究を重要視する風潮があるように感じられます。